【特別取材】岡山県矢掛町：矢掛高校を中心とした地域ぐるみESD

――“地域に支えられる学校”から“地域を支える学校”へ

環境自治体会議事務局長　中口 毅博

矢掛町（やかげちょう）は岡山県の南西部の山あいにある人口15,000人の小さな町である。矢掛中学校主幹教諭の室貴由輝先生は、体育の先生らしく、頭は丸刈りでがっしりした体格の先生だ。矢掛商業高校に10年、矢掛高校に7年勤務した後、2013年から矢掛中学に赴任して2年目であり、足かけ19年も矢掛町に根を下ろしてさまざまな活動を行っている。環境教育やESDに取り組むきっかけとなったのは、町内を流れる小田川で魚の産卵シーンを生徒たちと一緒に見て感動したことだそうである。本稿では、その室先生が起点となった岡山県立矢掛高校のESD（持続可能な地域づくり教育）や行政や地域と連携した矢掛町の持続可能な地域づくり取り組みについて紹介する。

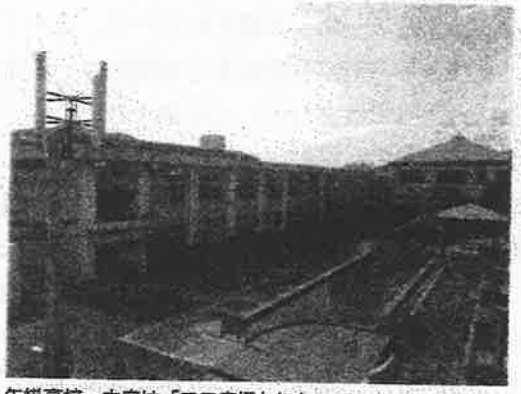
（出典：©Shogakukan 作図／小学館クリエイティブ）

図3-4-1　矢掛町位置図

井原鉄道矢掛駅から見た矢掛町市街地

1 矢掛高校　教科「環境」の誕生

矢掛高校は1902年（明治35年）設立の岡山県で4番目に古い学校である。2004年（平成16年）に矢掛商業と合併して新しい矢掛高校が設立された。普通科（探究コース、総合コース）、地域ビジネス科の3つのコース・科からなる。現在の生徒数は約400名で、うち矢掛町（＝矢掛中）出身者は約150名である。統合前、矢掛商業高校の教員だった室先生は、生徒とともに、ホタルやスイゲンゼニタナゴの繁殖、ポケット水族館の管理や川レンジャーの活動などをしていたが、2006年の閉校後はこれらの活動は矢掛高校に引き継がれた。活動の核となったのは、新しい矢掛高校が発足すると同時に、学校設定教科として設置された「環境」である。当時岡山県で初、全国でもまだ珍しいものであった。この教科「環境」の目的は「環境や環境問題に関心を持ち、人間と環境のかかわりについての総合的な認識と理解の上に立って、環境に配慮した生き方ができる技能や思考力、判断力を身に付け、地域社会の中で環境に対して主体的に働きかける態度や行動力を育成する」ことであった。「環境基礎」「環境演習



矢掛高校　中庭は「エコ広場」になっている。県の「エコ広場UD整備事業」に生徒の提案が採択され2008年に造成された

小田川での川レンジャーの活動。室先生が環境教育にのめり込むきっかけのひとつとなった

Ⅰ」「環境演習Ⅱ」「環境科学」という、大学の環境冠（かんむり）学科顔負けの科目が誕生したのである。

この学校設定教科「環境」の開設の経緯について、室先生は次のように話してくれた。「スーパーバイザーとしてカリキュラム作成時に私や山本先生を指導してくださったのが、小野芳朗教授（当時は岡山大学環境理工学部、現在京都工芸繊維大学）です。小野先生は『本気で環境教育を行うのであれば、環境保全・自然体験活動だけではダメ。これからの環境教育にはESDの視点が必要。』とESDの重要性について説かれました。これが矢掛高校とESDの最初の出会い、2003年のことです。」

矢掛高校の進路課が書いた当時を振り返るレポートでは、この教科について「室、山本、中江という“矢商やんちゃ組”と言われた3人が、バイタリティが下降気味だった矢掛高校に注入した“看板破り企画”であり、“スゴ技の一手”であった」と書かれている。また「当時の風当たりは相当に厳しく、学校からの協力体制も多くは望めないままに、向かい風の中を辛抱して守り抜いたのではないか」とも書かれている。室先生らは矢商時代の環境活動を通じて培った役場や地域における人脈や、生徒からの絶大な信頼を得て、この教科を実践して行かれたのだと容易に想像できる。

教室での授業以外の課外活動でも岡山大学の先生や企業など外部の協力も得て、白石島や上勝町などでの全コースの生徒が参加できる宿泊型実習や研修が実施されるようになった。

さらに、教科「環境」での取組を進路指導と結びつけることで、生徒に芽生えた問題意識が将来の職業や進路選択に役立つようになり、その結果推薦入試やAO入試の合格者が増え、10人前後だった国公立大学の合格者数が20人以上になる。

白石島ESDプログラムの一コマ。遊歩道整備について説明する室先生

私はその卒業生の一人、愛媛大学法文学部人文学科観光まちづくりコース3回生の小野舞菜さんと、8月末に愛媛県内子町の臼杵集落での実習中に偶然会った。農家を回り、なりわいや伝統文化に関する調査に熱心に活き活きと取り組んでいた。

2 「やかげ学」の誕生

さらに2010年から総合コースにおける「やかげ学」がスタートする。当時、探究コースは大学進学、地域ビジネス科（当時はコース）は就職とはっきりしていたが、間にはさまった総合コースの生徒はなかなか目的意識を持てないでいた。また進学から就職までさまざまな能力レベルの生徒が混在し学校のカラーがはっきりしないことに親は不安を感じ、矢掛町外の高校へ進学させたがるようになったせいで、矢掛中学からの進学者は減る一方であった。そこで校内で改革委員会を立ち上げ、地域との連携や地域貢献活動に重点を置いた学校設定教科の設立を検討していた。矢掛町との関係も「環境」での活動やボランティア活動などを通じて深まっていた。その結果、矢掛町、矢掛町教育委員会と協定が結ばれ、地域での活動体験を通して、達成感や充実感を持たせるとともに、自己の進路を模索する活動に結びつけることをめ

ざす「やかげ学」が誕生したのである。

「やかげ学」は毎週木曜日の午後の時間を使って行われ、矢掛町についての講義や町の施設などを使った実習・活動→活動のまとめ→施設や地域の方や中学生を招いての報告会の開催といった流れで実施された。室先生は当時のことをと振り返って言う。「『やかげ学』2期生からは、国公立大学に進学する生徒も現れました。入学時には国公立大学を目指す探究コースに入らなかった生徒が、『やかげ学』を通じ、学習意欲を高め、目的意識を持って進学していったことは、『やかげ学』に含まれる可能性を示したものでした。」

このように、統合を機に始まった環境教育を入り口にしたESDが教育活動全体に浸透していき、持続可能な社会の担い手を育成するという明確な目標を持ったものに変わっていった。明確な目標を持てるようになったのは高校サイドだけでなく、生徒たちも同様である。その成果は国公立大学の進学者が増加するだけでなく、地域振興系の学部や学科を受験する生徒の増加となって現れた。室先生は言う。「この子たちが具体的な目的を持って進学し、しっかり学んで地域課題に向き合ってくれると嬉しいですね。」

3 現在の矢掛高校の学習体系

2013年、室先生が矢掛中学校に転出し、逆に矢掛中学校の川上公一校長が矢掛高校の校長に就くという異例の交流人事が行われ、環境科を創設した“矢商やんちゃ組”の先生はすべていなくなった。しかしながら現在の矢掛高校でも、新たな教員たちの中で「環境」や「やかげ学」の理念や特性が継承され、それらをうまく活かした学校改革が進められている。

表3-4-1は2014年度の環境・ESD関連科目の構成を表したものである。1年で全生徒が環境CQ（キャリアクエスト）と呼ばれる総合的な学習の時間の授業を受け、環境や持続可能な社会についての学びを職業研究や進路選択と絡めながら学習していく。2年になると普通科の総合コースは3年までやかげ学を学び、地域ビジネス科は課題研究に3年まで取り組む。また普通科

表3-4-1　環境・ESD関連科目構成と単位数（2014年度）

		普通科		地域ビジネス科
		探究コース	総合コース	
1年	総合的な学習の時間（環境CQ）	1	1	1
2年	総合的な学習の時間（環境CQ）	1		
	総合的な学習の時間（CQ）		1	1
	やかげ学Ⅰ		2	
	課題研究			2
3年	総合的な学習の時間（環境CQ）	1		
	総合的な学習の時間（CQ）		1	1
	やかげ学Ⅱ		2	
	課題研究			3
	総合実践			4

表3-4-2　環境・ESD関連科目の年間スケジュール概要（2014年度）

	環境CQ			やかげ学		課題研究	
	全コース・科	普通科探究コース		普通科総合コース		地域ビジネス科	
	1年	2年	3年	2年	3年	2年	3年
4月	自己分析、環境入門、職業研究	テーマ設定、探究活動、全国学生コンテスト応募	環境CQのまとめ（個別の進路に応じた進路開拓活動）	矢掛町を知る	施設実習	目的設定、学習計画作成	目的設定、学習計画作成
5月							
6月							
7月	大学研究、進路選択						
8月				引き継ぎ会	引き継ぎ会		
9月		テーマ設定、探究活動、成果報告	具体的な受験準備（個別の進路に応じた進路開拓活動）	施設実習	成果のまとめ、プレゼン資料作成、やかげ学発表会	作品制作、資格取得のための学習	作品制作、資格取得のための学習
10月	身近な環境問題、持続可能な社会について						
11月							
12月							
1月	持続可能な社会づくりへの貢献（進路と仕事）を考える、プレゼン資料作成・発表	持続可能な社会づくりへの貢献（進路と学部）を考える	3年間の成果と課題の確認		やかげ学の成果と課題の確認	成果のまとめ、発表	成果のまとめ、発表
2月							
3月				中間報告			

環境CQの授業で個別指導する高木先生。室先生の後を継ぎ、地域や学校にあったESDの在り方を探している

の探究コースは引き続き環境CQを学ぶことになっている。

表3-4-2は環境・ESD関連科目の大まかな年間スケジュールを表しているが、座学による情報提供と個人作業やグループワークを繰り返し、また「やかげ学」を中心に校外での活動をふんだんに取り入れていることがわかる。

表3-4-3に矢掛高校における2013年度の主な地域活動の実績を示した。科目外でさまざまな活動が行われていることがわかる。徳島県上勝町や笠岡市白石島への研修、ユネスコスクール高校生フォーラムの準備、そして井原線DE得得市や土曜夜市、干し柿祭り、大名行列など、矢掛高校生の活躍は目を見張るものがある。

矢掛高校の3代目環境科主任、総務課長として現在のESD関係を担当されている高木潤先生は言う。「室先生が去った後のここ2年間には、また新たな局面も出てきました。ゲリラ的にやってこられた活動を、学校組織としてどう引き継いで継承していくかということが、残された我々の大きな課題です。この『認識のシェア』を地道にやっていったところが、現在の活動につながっています。『認識のシェア』に関しては、この後もずっと同じ問題が続いていくわけで、担当者や関係教員が異動などで抜けた後にどう繋いでいくのか。本校の大きなテーマの一つです。」

個性的なキーパーソンの「打ち上げ花火」に終わらせず、学校組織がうまく継承し継続していけた背景には、「なぜこの取り組みが大事なのか」「何のためにこれをやっているのか」といった「価値の共有」のための努力があったと言える。しかし矢掛高校が地域ぐるみでESDを展開できつつある要因はこれだけではない。そこで他の重要な要因について、次節で述べていく。

表3-4-3　矢掛高校における主な地域活動の実績（2013年度）

	校内活動			地域活動	
		やかげ学			
		2年	3年		井原線DE得得市
3月	上勝町日帰り視察研修		施設実習（2年の施設と同じところで継続実習）		
4月	ESD講演会（岡山大学教授）、ドイツ・フランス研修」報告（3年生徒）	矢掛町を知る（町の運営や振興計画、観光、歴史・文化、農業、福祉：町役場担当職員）、マナー講座			サイエンス部「スライム＆スーパーボールの作り方教室」
5月				ユネスコスクール高校生フォーラム（通称USF結成）（10人）	サイエンス部「プラ・プレートの作り方教室」、国際交流コーナー
6月					サイエンス部「紫外線発光ビーズ腕輪の作り方教室」「スライム時計の作り方教室」 国際交流コーナーで黄金のドリンク「インカ・コーラ」販売
7月	「白石島ESDプログラム」1泊2日のESD合宿（40人参加）	やかげ学テスト		土曜夜市「まちづくりアイディア」旧矢商の利用に関する案、山ノ上地区の活性化案、町を高校生が支援する案のプレゼン	サイエンス部「射的や輪投げ、ヨーヨー釣り、スーパーボール釣り」などミニ縁日補助
8月		やかげ学引き継ぎ		「川レンジャー」出動	
9月		施設実習（小学校45人、幼稚園・保育園10人、高齢者福祉施設13人、図書館・美術館4人、農業観光体験施設4人）	成果まとめ、プレゼン資料作成、やかげ学発表会	全国町並みゼミ矢掛分科会で小・中・高連携による町並み案内	サイエンス部「ストロー笛作り教室」
10月					サイエンス部「紙トンボ作り教室」
11月				大名行列（演者参列、物産販売、お茶席放送、清掃、募金活動準備・片付けなど）	サイエンス部「電磁石教室」
12月				干し柿祭りにおける「雲の上カフェ」	サイエンス部「万華鏡作り教室」
1月			3年間の成果と課題の確認	ユネスコスクール世界大会・岡山プレフォーラム	
2月	「一行一品運動」発表会（地域ビジネス科）				サイエンス部「エコ・カイロの作り方教室」
3月	環境講演会・ワークショップ（1年生） 環境CQ発表会（1年生、2年探究コース）	中間報告		流しびな祭り	

4 行政との連携への展開―矢掛高校魅力化プロジェクト

矢掛高校が成果を挙げ始めているころ、矢掛町役場も現状に危機感を持っていた。県立高校の再編で中山間地域の高校はどんどん無くなってしまい、高校のある町は矢掛町を含め3つの町しかなくなった。矢掛町でも小中学校の児童・生徒の減少が続き、矢掛高校への進学希望者も減少していた。「もしも高校がなくなったら町はどうなるのか」と何人かの町職員が危機感を持ち、2011年11月に矢掛高校の先生と役場職員が中心となり「矢掛高校魅力化プロジェクト」が発足した。

矢掛高校魅力化プロジェクト代表の町保健福祉課課長代理の松嶋良治さんは言う。「このプロジェクトの目的は、まず矢掛高校の存続が矢掛町の活性化に与える影響、矢掛高校入学希望者が減少している現実などについて、関係者が共通の認識を持ち、危機感を共有することです。そして、それについての対策を打ち出し、高校の存在価値を高める取り組みを行い、町内唯一の高校である矢掛高校の将来に向けての存続を確固たるものにすることなのです」。月に1回集まって話し合い、これまでに、①先進的な取り組みをしている自治体・学校への視察、②町広報紙平成24年5月号から毎号矢掛高校特集を掲載、③島根県海士町から講師を招き、全町民を対象とした講演会を実施、④中学生及びその保護者を対象としたアンケートを実施、⑤矢掛高校への支援について独自の調査・研究・提言などに取り組んだ。

広報やかげ 2014年11月号。自治体の広報誌に毎号高校のページがあるのは珍しい

このような活動が可能になった背景について、町教育委員会主幹の小川公一さんは次のように話す。「矢掛商業と矢掛高校の合併時の経験から、県立高校の再編整備に町の行政が関与できるとは思っていませんでした。この行政の意識を変えたのは、室先生をはじめとする当時の矢掛高校の先生方の功績です。最近では小中学校の子どもたちが地域の行事や町の行事にボランティアとして参加することが多くなり、『地域に支えられる』だけでなく『地域を支える』存在になろうとしています。そのような子どもたちの進学先として矢掛高校ほどふさわしい高校はありません。子どもたちは小中高を通して矢掛という地域のことを知り、学び、考える中で、この町の将来を託すことのできる人材が育ってくれると私は思っています。」

行政が積極的に参画したことの効果は随所に現れた。行政が矢掛高校の行っている魅力的な取り組みを正しく町民に伝え、中学生や保護者のニーズを行政と学校が共有し協働で改革を進めることができ、さらには役場内に「矢掛高等学校存続協議会」が設立され、矢掛高校に対する町からの支援策もオーソライズすることができた。小川さんは言う。「今後も矢掛高校がより魅力的な学校になるよう行政として支援し続けることで、この町の子どもたちの未来がよりよいものになり、将来に渡って矢掛という町が活力に満ち溢れた町であり続けられると信じています。」

5 小中高連携への展開―「YKG60」

矢掛高校を起点にした地域活動は、ユネスコスクールに登録している矢掛小学校や矢掛中学校、役場や住民団体と連携へと拡大し、一層強固になっていった。例えば従来から古民家の再生や宿場町としての景観整備に大きな役割を果たしている「備中矢掛宿の町並みをよくする会」や「宿場町やかげ流しびなの会」が、小学校の総合学習に協力し、小学生とコラボして「観光案内ボランティア」も実施しているが、2013年に「全国町並みゼミ」の参加者の観光案内を矢掛小学校・矢掛中学校・矢掛高校の3校が初めて連携して

流しびな行列のようす。背景は国指定重要文化財の矢掛本陣。旧宿場町の象徴だ

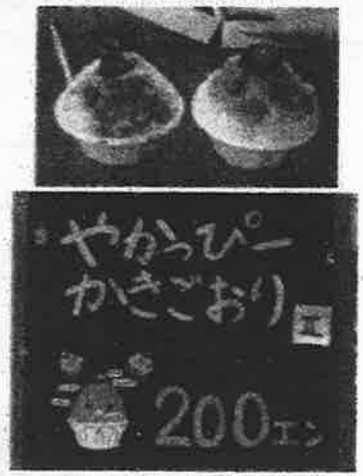
実施した。これが「やかげ小中高こども連合」として活動を始めるきっかけとなった。

小中高連携の動きをより加速させているのが2014年に発足した「YKG60」というグループだ。これは町の60周年事業として助成金を得て活動が始まったもので、総社市にあるNPO法人「吉備野工房ちみち」のサポートを受けながら、月1回土曜日の午後を使ってアイデアを出し合い、それを実行に移して行っているものである。この活動の中心的役割を担っているのが、「YKG60」の世話人をしている「からだ喜ぶ会」代表の井辻美緒さんである。からだ喜ぶ会は、2012年から空き家を借りて「からだ喜ぶ手作り市」を開催し、地元のママさんたちの手作りの品を集め、市として出店している。その市の近くで子どもたちの遊び場として、消しゴムはんこのオリジナルハンカチ作りのワークショップを始めた。それ以来お手伝いを中学生、高校生にお願いしているそうである。

この井辻さんと矢掛中学校に移った室先生が、子どもが矢掛小に通っている保護者として結びつき、主婦グループと学校の先生のネットワークとして発展していく。YKG60のミーティングでは、大人は原則口出しはしない。子どもたちの訪問先に事前連絡しておくぐらいが大人の役割だ。井辻さんはYKGの活動内容について次のように話す。「例えば矢掛の魅力について見つけるブランディングをした時に、子どもたちだけが、ゴミが多いことを言いました。子どもにしか見えないゴミってなんだろう？　そんなところから、そのゴミ問題について取り組むようになりました。ゴミを実際に見に行こう、大人にも見てもらおう、とゴミ拾いツアーを企画しました。そこで見つけたのは、たばこのゴミが多いということでした。そこから、どうやったらゴミを減らせるのか、自分達になにができるのか、そんなところを話し合っています。」

YKG60の会合で子どもたちに挨拶する井辻さん。さあ、これから何がはじまるのかな？　やかげ町家交流館にて

YKG60の大きな成果のひとつは、まちのキャラクターを使った「やかっぴーかき氷」である。9月の第3日曜日に矢掛駅で開催された井原線DE得得市で販売された。これも最初は小学生がアイデアを考えたが、それを中高生が実現可能なものに変え、試作、ライセンス取得、仕入れ、広報、販売までの全てを行ったそうだ。井辻さんは言う。「この事業は、子どもたちが枠から外れ、みんなが持っているその人にしかない個性、輝き、役割を、学校を飛び出し、地域活動、日常の中で発揮して欲しい、そしてそういう子どもたちに触れ、大人も同じように枠を外し、みんなで繋がりあっていきたい、という願いから始まりました。しかし、任せきって、想定外のものになると、把握できなくなる、フォローできなくなる、それがとても怖かったです。私なりの流れは頭にあるのですが、子どもたちがどんなものを出し、何



井原線DE得得市で販売され大人気だった「やかっぴーかき氷」。限定50食が1時間足らずで完売。追加した30食も即完売だった

を選び、どうなっていくのかはわからない、実はそれがすごく怖いんです。でも本気で任せてみると、私の密かに思い描いていたゴールより、はるかに素晴らしい、しかも全てがつながる、面白すぎる流れを子どもたちは作ります。ほんとにすごい子どもたちです。」

小学生が突飛なアイデアを出し、中高校生がより実現可能なものにしていく。大人たちは枠にはめず、誘導せずに自由に考え行動できるように支える。言うのは簡単だが実際にはなかなか難しいこのようなやり方を貫くことが、単なる小中高連携ではなく子どもたちが地域づくりに主役になりつつある要因と言えよう。

6 まとめ

矢掛高校のESDを中心とする矢掛町の取材を通し、ESDの役割は単に持続可能な地域づくりの「未来の担い手」を育成するものではなく、子どもたちがリアルタイムに地域おこしを実践する場であることに気づかされた。地域活動は、多くの地域では行政と住民団体のパートナーシップによって実践

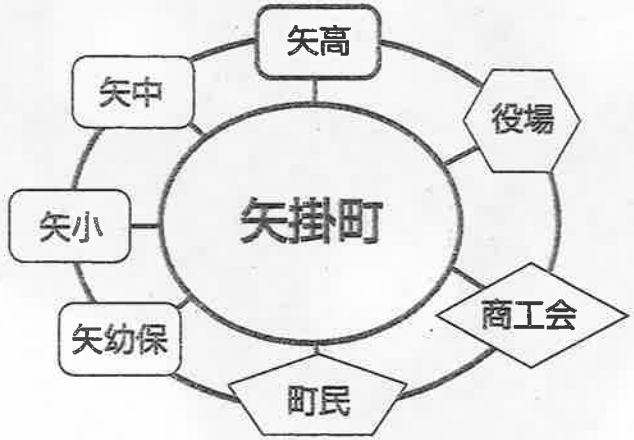


図3-4-2　連携が進む矢掛町（矢掛高校ESD通信より）

されることが多いが、矢掛町では子育てしながら活動している井辻さんのグループと学校の先生でありながら地域活動を幅広く実践している室先生など、他の地域ではなかなか表舞台に出にくい主体が中心となり、行政や地域、小中高とつながって、すばらしい取り組みが成立している。その基盤となっているのは室先生らが長年かけて土台を築いた矢掛高校のESDであることは言うまでもない。現校長の川上先生は著書の中で「地域活性化の取組に積極的に参加することこそが、矢掛高校に課せられた使命」と言い切っているが、このような認識を持つ校長先生がトップにいることが、さまざまなものが土台の上に持続的に築かれつつある要因になっている。

雨の中行われた39回目の大名行列。殿様役は町長が扮している（2014年11月9日）

私は毎年11月の第2日曜日に開催される大名行列を2014年に初めて見たが、もはや商店街の中を大名行列が歩き露店が出るだけのイベントではなくなっている。町家や空き家を使った地域ぐるみ活動の発表の場と化しているのである。本陣会館で開いた落語を主宰するなどいろいろことを仕掛けている矢掛在住で笠岡市役所勤務の佐藤さん、有機農産物や加工品を売っている河上農園さん、高知からUターンして食物アレルギー対応ケーキを作っている木の丸洋菓子店さん、笠岡から来て本屋でありながら有機農業を始めている森さんと娘さんご夫婦など、求心力が働き町外から人が集まってきつつある。もちろん矢掛高校の生徒も、開発したパスタやお面やさんのお店を出していた。また井辻さんたちのグループは消しごむはんこを押して作るオリジナルハンカチづくりのワークショップをしており、室先生が顧問を務めるバ

レーボール部の中学生たちが店頭で呼び込みをしていた。矢掛町役場の職員や地域の方が大勢出てさまざまな役割を担っていたのは言うまでもない。さまざまな人と組織がつながって町を盛り上げようとしている活動している最前線の姿の一端が、この大名行列の日に垣間見えた。この町で育った子どもたちは、“地域に支えられる子どもたち”ではなく、“地域を支える子どもたち”に成長していくことであろう。

参考・引用文献

室貴由輝（2013）小田川が運んでくれたもの．高梁川流域連盟機関誌「高梁川」p184-194.

矢掛高校進路課（2013）平成24年度「環境CQ」レポート〈1年目〉．53pp.

矢掛高校環境科（2013）白石島×矢掛・林野ESD．24pp.

矢掛高校（2014）平成26年度学校要覧.8pp.

矢掛高校ホームページ．http://www.yakage.okayama-c.ed.jp/　2014年11月16日参照.

矢掛高校環境科（2013）ESD通信第1～10号

矢掛高校（2011）生徒・教師の意識を改革「やかげ学」を軸に学校の特色化を図る．指導変革の軌跡No167,View21.

持続発展教育フォーラム（2011）第1回持続発展教育大賞　受賞校実践集

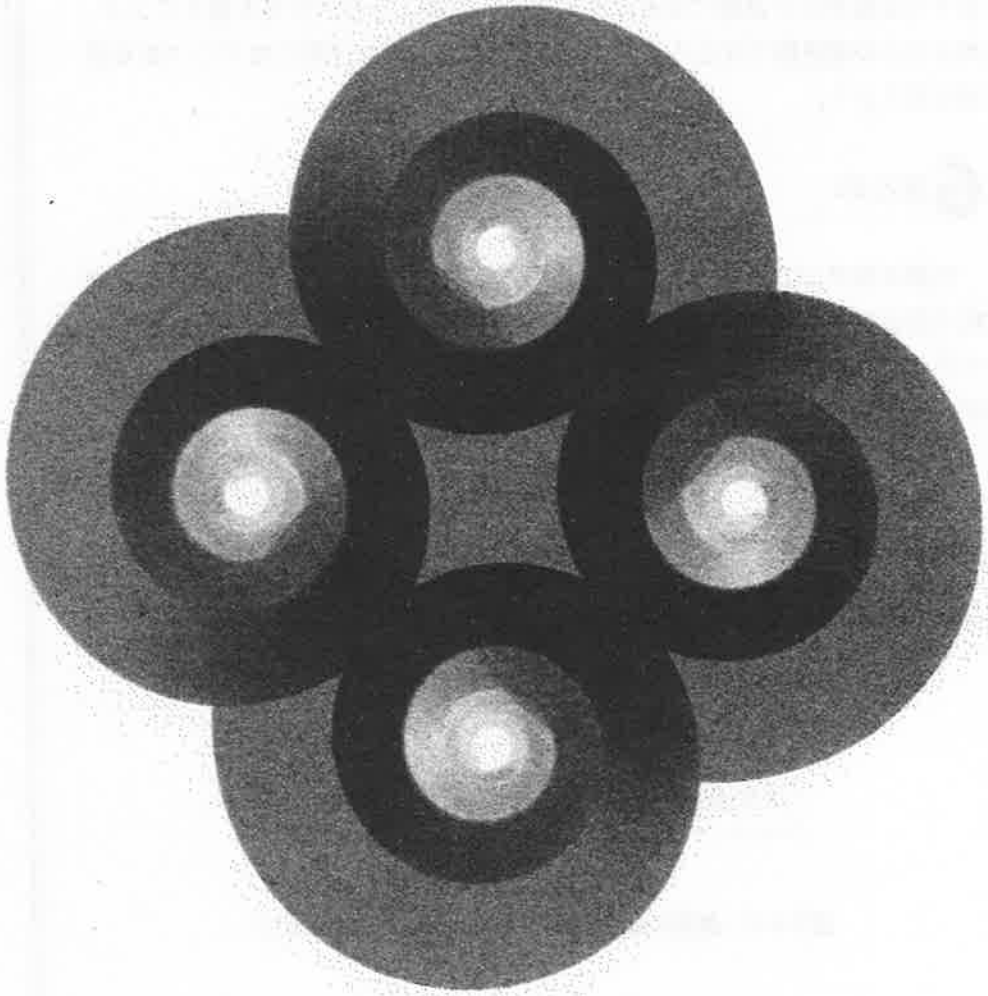
川上公一(2014)人口減少社会における地域を支える人材を育てる後期中等教育のあり方ー持続発展可能な地域をつくるためにー．未来教育研究所研究助成実践事例発表大会，10pp.

環境自治体白書

2014-2015 年版

住民力・地域力を活かした持続可能な自治体づくり

333の施策の実施市町村がわかる一覧表、先進事例を掲載――長野県飯田市・愛媛県内子町など



中口毅博＋環境自治体会議環境政策研究所